

終わるとき

坂田三允（長野県看護大学）

3 か月ほど前に、近所のスーパーマーケットが潰れた。客の入りの少ない店は姿を消し、新しい店ができる。どこにでも起こっている現象だ。けれど、何だか寂しかった。そして1 か月前に新しいスーパーが開店した。品物が悪いわけでもなく、安いからとても混雑しているのだが、ゆとりがなくて殺伐としている。何かが壊れていくような気がする。

心にぬくもりが欲しくなって、この書を手にした。著者の芥川賞受賞作である『ダイヤモンドダスト』は読んでいないけれど、『落葉小僧』や『阿弥陀堂便り』などは、しみじみと心にしみ込んでくるものがあって、私はとても好きだった。

しかし、この書はしみじみとするというよりはもう少し鋭角的に切り込んでくるという気がした。短篇が集められたこの書に共通しているのは、「死」であり「家族」であり、あるいは「人間の弱さや脆さ」であり、「人の気持ちのすれ違い」であり、それでもなお「生きていること」であろう。

『家族』は、医師である夫、その姉、妻、夫の継母、夫の父が、それぞれモノローグ風に夫の父の死までの自分の人生を綴る物語である。そこで語られるのは、夫との関係であり、夫の父との関係である。同じ場を共有しながら、そこに生起している現象を受けとめる各人の想いは異なる。一人ひとりの想いはほとんど語られることなく、ときにさざ波が立ちながらも、嵐に

はならないまま日々の営みは続いていく。当たり前といえば当たり前のことなのだが、人は結局のところ「ひとり」なのだと、あらためて思った。夫の父が語る「たまに義理で見舞いに来る連中は、まだ若いんだからしっかりしろよ、と勝手な常套句を捨て置いていく。やかましい、好きにさせろ！」という言葉が妙に心に響いた。

私たちは善意だと信じて、それを他者がどのように受けとめるかにはまったく無頓着に他者とさまざまななかかわりをするのが、多いのではないだろうか。

そして、この短篇は次のようなモノローグで終わっている。

「今が終わる。

なんだろうと一語一語追いかけてみる。

い、ま、が、お、わ、る。

医者と呼ばねえでいいかい、との誰かの間延びた声がする。

い、ま、が、お、わ。

い、ま、が、お。

い、ま、が。

い、ま。

い。

。」

私はこれまで、自分の死のときを知りたいと思っていた。せめて身辺整理をしたいから。けれども、これを読んで、それはどうでもよくなっている。人間は、生きているかぎり、常に未完のことが存在するのだから。



さかた・みよし

千葉大学看護学部助手、東京大学医学部附属病院（精神科婦長）を経て、1997年より長野県看護大学教授。日本精神科看護技術協会第二副会長。著書も多いが読書量も多い。しかもその守備範囲は広く、専門書からコミックに至るまで。特に好きなジャンルは推理小説とのこと。